

Q: 先日夢を見たんです。すごく荒唐無稽な夢で、夢の中ではそれを本当だと思い込んでいて、家族みたいな人がいるけど、知らない人なんですけど自分は家族だと思い込んでいる。で、何かをすごく探していて…必死なんですよ。

A: ふむふむふむ。誰が探しているんですか？

Q: 夢の中で自分だと思っている人。

A: ああ、「自分だ」と思っている人も、自分じゃない人のことを自分だと思っているんですね。

Q: はい。

A: ところで面白いですね。今もあなたは自分じゃない人のことを自分だと思っているんですよ。この人のことを。

Q: ……そうですね。

A: それがちょっと分かったんじゃないですか？

Q: そう、なんです。

A: ほう、その夢はすごい重要な夢じゃのう。その夢をみんなも知るといい。はい、もうちょっと聞いてみましょう。興味深いですよ。

Q: で、その夢の中の人はずっと本当にもう子どもみたいに必死なんですよ。何かを探すのに。ものすごい必死に探してたんですよ。それで、起きて、夢から覚めた瞬間に必死に探してた何かも、もう無くなってしまって、ただ何か探してて焦ってたなという思いだけが残ってたんですけど。その人にとってはすごい大事な何かを、一生かけてみたいな感じで探していたんですけど、夢から覚めて、全部無くなって、何も無い。なんか、今このここにいる私もそうなんじゃないかと思って。誰かの見ている夢？の中で自分と思い込んでいる何か。

A: うん。……ちょっと惜しいです。その考えはほんの少しね、核心を外してしまっている。でも、相当惜しいところにいつていますね。どう惜しいと思いますか？誰かの見ている夢なののだとしたら、別の誰か本体みたいなのがいることになりませうね、具体的な人としての。

Q: うーん、そうですね。

A: うん、その具体的な人みたいのが仮にもし見当たったとして、ではその人が夢ではない証拠ってのも、また無いんですよ。つまりどんな人として生きていたとしてもその人のことを「自分だ」って思い込むように、生き物というのはできているんですけど。ええ、ただ本当はそれは自分ではないということなんです。だから、この本体ではない別の、その夢を見ている本当の、目が醒めたら本当のこの人であるという人がいるわけではなくて、ただ無定形の何の性質も持っていない名づけようの無いものが、もし敢えて本体という言葉を使ってもいいなら、本体です。で、その本体を見当てようとして、今取り組みを行っているようなところですよ。

この人間、今自分が自分だと思っている人のことを本気で自分だと思い続ける以上この人が何かを探したくなったら、その探しているのがすごく重要そうに見えますし、この人が誰かのことを嫌ったらその嫌いだっていう感情がすごく重要そうに見えるでしょうし…。あるいは、その夢の中で家族がいた、今の家族とは違う人達。その時その夢の中では「これが家族だ」と思い込むでしょう？今の現実の中で、「これが家族だ」って思い込んでいて「これが私のお母さんだ。これが私のお父さんだ」と思い込んでいるんですけど。で、それに基づいているんな思いが湧いてきて、その思いのことをとても本気に思っているんですけども。それを外していくための最大のコツは、ある考えが湧いてきた時に、またある印象が湧いてきた時に「あっこれは勝手に湧いてきたものであって、それが自分とは言えないんじゃないだろうか？」という判断を事後的にするのではなくて、まあ事後的にですら初めのうちはそれも無いよりはずっと良いんですけど、湧いてきたその瞬間にそこから離れている、ということが継続して行われるように取り組むことです。その際、私的に思う最初の関門、難関はこれなんです。ある生じてきた思い、例えば必死にこれを探してきたという思いが夢の中ではなくて、この現実、今回

の現実という名の夢、あれを探さなきゃとかこうしなきゃ、という思いが生じてきた時に、「あっこれは自分の中で自動的に湧いてきただけで、幻のような、夢のようなもので囚われるに値しない」と判断をしたとするじゃないですか？その時、その最新の「囚われるに値しない」という判断も夢であることに同時に気づいている感じになることが最初の難関です。「これは夢だ」という判断はなんとなく現実的に感じるということが、最初の難関になって、判断を現実視するということからなかなか抜け出せません。それでも、いろいろなものを現実だと思い込んでいたより、「これは夢だ」と思い始めているといくつかの夢が手放されるので、出発点として重要なんです。ただ、次の所に行くのを邪魔をするのは「これは夢だ」という思いや判断を現実だっ感じるということなんです。「それを思っているのがこの私だ」という「私がいる」という無根拠な感覚の土台をなして、次はそこを突破するのが大事なことです。坐禅中にある考えがいろいろ湧いてきてもその外に立って流すことを、もっともっと繰り返してください。するとある時に「こういう考えや判断は全部脳が作っている幻想のようなもので、だから取るに値しない」と分かってくると、自分という感覚からかなり距離が出てくる。その時足かせになっているのが、繰り返すと「そのような取るに値しない」という判断の手助けになっている、そう考えている自分がいる」という感覚と、それは夢ではなくて現実だと感じられることです。けれどもそうした判断も感覚もあくまで心の中で積まれてきた感情処理のパターンに従って、心の中に勝手に流れてきたものであって幻なんだ、と絶えず眺め続けていて、どこも踏み台にしない、足場にしないようにすることです。その時に、心がこの身体につながっている感じ、この身体に従属している感じ、というのがボーンと外れてしまって、これは単なるロボットみたいなもので、ただたまたまこの体と脳みそに貼り付いているだけで、これは自分でも何でもないとことが分かります。その心持ちのときに鏡を見ると、面白い

ですよ。それが自分だっ感じる認識が全く無いので「何かの物体がそこに映ってるね」という感じになります。太陽によって影ができて、私の影だということは思いません。「影がそこにあるね」というようになります、この「自分の」という感覚が飛んでしまえば、それは無敵になります。シャーンティデーヴァっていう昔のインドのお坊さんが面白いことを言っていて、もともとはお父さんの精子とお母さんの卵子、その細胞によって作られたのであって、敢えて誰の？と言えはお父さんの細胞とお母さんの細胞であるものを、なぜかこの意識は「私のだ」と思っていて、「私が自分で作ったもの」は何も無いのに、「私のだ」という所有意識を抱いて、「これが私だ」という幻覚を抱いている。そのどれがいったい自分なのだ？ということを行っています。

はい、そのことの重要なヒントになる夢を見ましたね。今も、夢を見ているのです。これが私だという夢。

Q：この夢から醒めたら何も無いんですよね？

A：その言葉の意味にもよるんですけど、何も無いとはどういう意味ですか？

Q：夢から醒めたら全く違う別の何かがあって・・・神みたいな人が夢見てるのかなと・・・。

A：へえ、なるほど、なるほど。醒めるとね、醒めてもこの人の外に行くことはできないんですよ。とりあえず今回生きている間は、この人と何らかの形で仲良くしていくしかないんですよ。自分がこれと分かち難く、これに支配されるしかないという従属してる所から、まあこれは単なる乗り物に過ぎないなという感覚になるだけであって、どうしても結局のところその状態で生じる思考も、変な言い方をすれば、今取り付いているこの脳みそとこの体に基づいて蓄積してきた知識を元にしか考えることはできませんしね。そういう意味では、夢から醒めても何も変わらない。ところが、大げさな言い方をすれば全てが変わるのです。この人がいろんなことを考えたり喜怒哀楽を生じ

させたりするんですけど、それがどんなものが生じても「これ自分じゃないからどうでもいいな」という感じがあって常に醒めているので、それを「自分だ」と思わなければ・・・どうなりますか？

Q：真剣に取ろうとしないというか。

A：はい、ズバリその通りです。真剣に取ろうとしない、ないしそれが全て意味を失ってしまった状態になります。すると、仮にそれを「私」と表現してみますよ。あぁつい先日、それを模式的に図に描いて自分の手帳にメモしておいたのですが、それをちょっと思い出しながら説明をしてみましよう。だぶん、最初は皆さん、それが「真の私だ」と考えるのがひとまず安らかになるのに役立つと思います。仮にそう考えてみましょう。真の私がこの個体を離れた所に超越している感じが分かったとします。すると、直感的にはそれはすごく安らかそうでしょうか？まあとんでも苦しい感じではなさそうでしょうか。で、とても安らかなんですけど、その安らかさは超越した所で生じると思いませんか？それともこの個体の中で生じると思いませんか？

Q：超越した所？

A：うん、惜しい。超越したことで生じるんですけど、超越した所では生じないんですよ。

Q：超越してるから？

A：うーん、「超越してるから」って言葉の意味がいまいち分からないんですけど、言葉の意味によっては当たっています。超越してる場所って、ものすごく安らかなんですけど、その理由は、何にも無いからです。つまり、あっそうそうこの間、思いついた単語は「搾りかす」なんですよ、ある意味。超越して神と言っていいような境地です、それは、と同時にゴミみたいなものなんです。というのはですね、具体的なことはこの人の中でしか起こらないからです。その超越した神の境地では、なんにも起こらないんですよ。ただ、全てを知っていることだけができて、それ以外何の機能も持っていないので、そこに行くと何にも起きないので

すごく安らかなんですけど、でも「安らかさ」っていうのは具体的な内容を持っているでしょう。それは、この人の中で起きるんですよ。で、それを超越したところから眺め、知っていることはできるんですけど。つまり超越したことにより、この人はすごく安らかになるんですけど、その安らかさも自分じゃないし関係ないんですよ。「この人は安らかになったらしいけど、関係ないや」という感じです。ちなみに「関係ないな」というのはどこで起きるか分かります？超越した所かこの人の中か。

Q：この人の中で起きます。

A：分かってきましたね。そうなんです。「自分には関係ないな」って超越した所で思ってるつもりでも、この人がそう思っているんですよ。この人の手助けがないと、超越した所は、なーんもできん。完全な、そしてなおかつ無能な神なんですよ。完全無欠で、なおかつ無能です。不具です。ですが、このことが分かってくればくるほど、言わばこの「神」のパワーに充填されて「この人」がどんどん智慧に満ちてきます。そして「神」は搾りかすです、と言ったことの意味が分かるでしょうか。何かしようと思っても何もできないからです。全て、この具体的な人がやる。で、その搾りかすが真の私です。この人は私ではなかったということが段々分かってきます。この搾りかすこそが「真の私だ」ってなった時に、もうお分かりでしょうけど、その考えは搾りかすにはできないでしょう。搾りかすなんですから。この人が思うんですよ。ということは、ちょっとおかしいじゃないですか。この人が「真の私は搾りかすだ」って言っても、それを思っているのはこの人であって、搾りかすではないですよ。つまり搾りかすが自分のことを「私」って思うことはできないんですよ。ということを次は観察してみてください、そこまで来たら。すると何が分かるかという「これが真の私だ」ということを考えることすらできない無能な神は「私」とは言えないということが分かるはずですよ。「この人が私じゃない」と分かるのがま

ず第一段階です。その時とりあえず「この神みたいなものが私だ」という感覚が分かってきたら、すごくそれは良いですけども、ただ「それが私だ」と思っている間は、まだちょっと惜しい所にいます。「それが私だ」と言えるかどうか吟味してみると「私だ」と思っているのは、この人であって、この搾りかすは「私だ」ということも思えないなら「これも私ではない」と、分かります。…そう思っているのもこの人ですけど。というぐらい全てが洗い流されていくと、最終的にこの人も私ではなく、神様も私ではないならどこに私はいますか？ということで、宇宙から「私という思い込み」が完全に消去されてしまう、ということです。もう一つ言えば、「私」が消去されるというのは便宜上の言い方であって、前にも別の言い方で言ったかもしれませんが、「私」が消去されるためには、もともといる必要があって、「いる」のを消去するなら、そういう言い方ができますけど、ただ分かるだけです。調べたんですよ。自分の体と思っているものや心を調べても、どれも「私」ではなかったと分かるので超越するんですけど「超越して神みたいなここが私」って思ってたのも「私」じゃない。ってのが調べた結果分かったら、どっちも「私」じゃないなら、元々「私」なんてどこにもいなかったというのが分かっちゃうだけの話なんです。今まで「私」という感覚に基づいていろいろ悩んだり、苦しんだりしてきたのです。しかし元々「私」がいなかったということが分かったら、その時、大笑いみたいなものです。アッハッハーです。なぜなら「私」がいなかったら、「私」がいろいろ悩んできたというのも全部思い込みであって、「私」が悩んだということも実際は無かったんだ。「ほんと？全部無かったんだ」っていうことすら、この神様は思えない。って、それもこの人が思ってるだけで、この神様は実は一度も傷ついてなかったし、何事も起こってなかったし、そもそも神様は「この人」じゃなかったから。全然何も関係無かったのに、この人のことを一生懸命になっていろいろやってきただけで、心の本質は全知全能の搾りかすに

過ぎなくて、そこでは何も起きてなくて、元々、ひそかに実はすごい神様だったんだって全部超越しちゃう。尚且つ「それが私だ」って思ってるのも「あれ待てよ、それも“私”じゃないでしょ」って分かって、ほんとアッハッハというような感じなんです。

Q：ほんとは何にも起こってない・・・。

A：そうです。何にも起こってない。ズバリそうです。脳が幻覚を見せているだけで、その幻覚を突破するなら本当は、金輪際、何にも起きてない。という話を先日、元私の所で働いてくれていた人にしていましたら、その人、スピリチュアルな何か本とかをたくさん読んできたらしくて、外国のナントカっていうスピリチュアルな人が「そもそも何にも起きていないし、ベッドから起き上がることもすら起きていない」ということを書いていて、「まさにそれですね！」とおっしゃっていて「まさにそれかどうかは分かりませんが、確かにその人の言っている通りですね」という話をしました。

はい、その神の境地からすると本当は何も起きていないのです、一切。ということと同時に、相対的な社会的な観点からすればいろいろ起きているのです、仮にですが。社会生活上、その仮に起きていることをちゃんと対処しないと、他人を傷つけてしまいます。絶対的な立場では何も起きていないということを体得することと、相対的な立場ではいろいろ起きているのでうまくやるということは、どちらも重要なことです。

今非常に賢明なことをズバリ言い当てられたではないですか。「本当は何も起きていない」ということが修行を通じてパーンと分かった時、心の芯から喜びが湧き上がってきて、アッハッハーです。それも起きてないということです。そのアッハッハーも起きてない、のです。

(テープ起こし：AH)